批評特集

木澤豊詩集『燃える街／羊のいる場所』

目次

魂に引かれて歩く　－『燃える街／羊のいる場所』の所在	川鍋さく	2
静かな世界	木谷登志子	6
木澤詩人、流れ出す一連のファンタジーについて	にしもとめぐみ	7
たましいとのつながり	浜田裕子	8
見えない物象への細密なつぶやき　あるいは　たましひのゆめ	福田　知子	9
輪郭の崩壊　～木澤豊詩集『燃える街／羊のいる場所』に寄せて～	前田珈乱	15
いのちを吹き込む	マダムきゃりこ	17

魂に引かれて歩く

『燃える街／羊のいる場所』の所在

川鍋さく

一年ほど前だっただろうか。大阪で定期開催されている詩の読書会「知る詩る」にて、私は木澤豊さんと出会った。私はその日初めて木澤さんにお会いしたので、挨拶を交わすまで、新しい参加者の方かと思っていたのだが、以前、現在の「知る詩る」の原形となる読書会に木澤さんは参加されていたとのことで、詩人としても読書会メンバーとしても大先輩であると知った。

「知る詩る」では主に、いま現在の同時代に出版されている新しい詩集ではなく、過去に出版されてきた先人たちの作品を取り上げており、日本の現代詩の歴史的側面に触れる場面も多い。20 代である私にとっては、当然ながら、会で取り上げる全ての詩人が先人であり、彼らの作品にみられる情景もまた、かつて存在した過去の時代を映している。しかし、1937 年のお生まれである木澤さんにとっては、各作品に登場する風景や時代の雰囲気は、単なる情報ではなく木澤さんご自身の記憶とリンクするものも多い。そのため、読書会の参加者たちは木澤さんのコメントを通して、作品の中に言葉として保存された時代の空気を、幾分かリアリティをもって感じることができる。読書会で木澤さんとご一緒するようになってから、今さらながらと言うべきだが、詩をはじめ文芸作品というのは、教科書からはこぼれ落ちてしまう、時代の空気や漂う微細な塵さえも保存できる精密なタイムカプセルのような機能を持っているのだと思い知った。

それでは、木澤さんの最新詩集『燃える街／羊の居る場所』の中に保存された、彼の〈時代〉の空気を、ごく一部ではあるが、ここに開けてみようと思う。

本詩集は、「Ⅰ　いまから書かれる海」と「Ⅱ　羊のいる場所」の二部構成となっている。Ⅰ部とⅡ部で描かれる題材や風景にはさほど大きな違いはなく、詩集全体を通して、海と山に挟まれた「突端」の町が舞台となっている。その「突端」の町で、語り手は自らの記憶と幻夢と現実の境を行き来しながら、自分という存在が終着すべき時と場所を求めて歩いている、というように読めた。

しかしながら、Ⅰ部とⅡ部に漂う空気感には、どことない差異が存在する。

Ⅰ部の中では、語り手が生きてきた時代の景色を焼き付けるような作品や、時の経過とともにその景色ごと時代からどこか浮いてしまったような、所在なさというものを感じる作品が印象に残った。
その中の一篇。

白い浜に十数頭　黒い頭が並び
いるかは静かに眠っている

藍いろの海きらきら
長柄の刃物が獲物の皮膚をすべり
白い浜が赤く染まり　海へ広がっていく
砂の粒子に血が浸み
清冽な風が吹く

今夜　漁師は　肉の煮付けで晩飯だ
家族は肉をむさぼるだろう
男は焼酎を飲むだろう
これが食欲ちゅうもんだ

木の漁具がまるくおだやかに古びて
男たちの呼び合う声は鋭く明るい
そんな日があったな
沖で潮が奔ったな

あの船小屋の浜は安っぽいビルが建ち
貝殻もフナムシも木っ端もさび釘も潮の匂いも
ない地面を歩いた

漁撈資料館には　いるかの一片の骨もない
浮世絵のかたちの富士も
うっすら　うそっぽいし

なんか不吉な圏外に出てしまったようで

何も書いてない遺書を手渡されたようで

日経ち　日立ちて三万日
わが骨一片もない
岩の縞目の果てにきたんだな

（「霧裂き　一千行の波　到る」）

最後の一行にある「岩の縞目の果て」とは、地層の線と読むことができる。地層の線が果てるところとは、すなわち記憶された時代の最後、語り手が生きる時代の終わり、と読める。これを〈死〉と捉えることもできるが、「岩の縞目の果て」は終わりの地点ではなく始まりの地点ととることもできる。すなわち、生まれる以前に〈帰還〉するという意味を持たせることもできる。

本詩集の全体を通して、語り手は自らの老いと向き合い、まるで終わりの場所とその時がくるのを求めているようにも感じられるのだが、それは生に対する未練だとか諦めだとか、負の印象のものではなく、むしろ己の本来の姿、本来の居場所へ手を伸ばそうとする前向きな印象を感じられる節がある。Ⅱ部に集められた詩篇の雰囲気が、より一層、そのような前向きな印象を与えるのかもしれない。

Ⅰ部では語り手が生きてきた時代の風景の印象が強かったのに対し、Ⅱ部では、語り手の中に存在し続けているある風景が、その存在感を滲ませている。それは、「階段の踊り場の窓」から見える「荒野」の風景。この「窓」という場所は、本詩集の中で（とくにⅡ部で）度々登場すし、そこから見える風景に、語り手は妙に惹きつけられる。

古い階段の踊り場の窓から　夕陽の野っ原を見ていた
散乱する石の影散り　平原はまだらに染まり

わたしにつきまとう窓辺で
見ていない光景を　子どものときから見ていた

（中略）

石の散乱する
石が産卵する荒野は
わたしの知らない故郷かもしれない

ならば

（「ここにいた」）

Ⅱ部ではこのような、語り手の、生きた人間としての存在ではなく、もっと根源的な、魂としての存在の居場所を求めるような詩篇が多く書かれている印象がある。

本詩集のⅠ部とⅡ部、それぞれの始まりの詩篇にも、語り手の、そして著者自身の魂としての根源なる所在地と言えるであろう一節が書かれている。

草というたましいのあつまるところ　揺らぐところ　休むところ
そこから来るひとを〈つれ〉というのでしょうか　ひつじが一匹

（「いまから書かれる海」）

草というたましいのあつまるところ
揺らぐところ　休むところ
そこから来るひとを〈つれ〉というのでしょうか

羊がいっぴき

（「羊のいる場所」）

著者は、前作である詩集『かもめホテル』が、自身の遺書代わり、つまり最後の一冊になるだろうと、同詩集のあとがきにて記していた。確かに詩集『かもめホテル』でも、語り手は自らの生の終着を色濃く意識していた。しかし、今作の『燃える街／羊の居る場所』は、前作からまたさらに一回り、自らの生とその痕跡を深く見つめ、その結果、死生観を越えた、〈魂の居所〉というさらに先の領域に到達した作品となったのではないかと思われる。そのためだろうか、本詩集を読み終えたあとに残る読後感は、哀愁よりもどこか希望めいた爽快なものであった。

静かな世界

木谷登志子

木澤さんの作品の世界は静かだ。山の夜は星や月がなければ本物の闇だし、窓から見える海に人の気配は少ない。けっしてそういう作品ばかりではないのに、少なくとも私は今までそういう先入観で木澤さんの作品をとらえていたような気がする。

『燃える街と羊のいる場所』を読み始めて木澤さんが「戦後浮浪児世代」とどこかで自己紹介されていたことを思い出した。終戦直前の舞鶴、戦後の横浜といった固有の場所と時代。ガード下、バラック、菜っ葉服。作者の少年時代の記憶にある風景が描かれているのであろうが、こういった作品にありそうなノスタルジーとは違った感触だった。

この詩集のなかで〝わたし〟の存在は繰り返し否定される。〝わたし〟はいない。誰かいたとしてもそれは〝わたし〟ではない。不安ではなく断定である。それはどういうことなのだろう。ここに書かれているのはまぎれもなく〝わたし〟の脳裏に刻まれているものなのに。

「やわらかく　まるいものと」は特に印象に残った。「わたし」が「置かない」と言ったものは何だったのか。１９６２年はどういう年だったのか。私には想像することしかできないが、それでもこの作品を受けとめられるのが不思議だ。

最後の「夕方に出かけるのなら」はとても好きな作品。それぞれの連がひとつの世界をもってひろがり、階段を降りる足音にむかって閉じられていく。この詩集の最後にこれほどふさわしい詩があるだろうか。

私は木澤さんの詩集はかなり古いものも含めて何冊か持っているが、この詩集がいちばん自分の肌に近いところで読めたように思う。そして改めて他の詩集を読み返すと、それまで通り過ぎていた一行にも立ち止まるようになった。

木澤詩人、流れ出す一連のファンタジーについて

にしもとめぐみ

木澤詩人にお会いしてからもう十数年が過ぎたのだろうか。仙人を思わせる「旅する詩人」の人だ。 この詩集は、詩を一つひとつ読むと言うより、流れだす一連のファンタジーのように読んだ。 木澤詩には「匂い」や「音」の描写がよく出てくる。そしてもう一つ特徴的なのは「木澤節」ともいえる、ちょっとした話し言葉「よう」「さ」「な」「よ」など、詩の中にアクセントのように詩人の生の声が聴こえるように入ってくることだ。しかしきちんと詩の言葉としておさめられていてとてもまねができない。同じように日常の食事のことなども書かれるがやはりきちんと詩の中におさまってしまう。
冒頭の印象的な書き出し：草というたましいのあつまるところ　揺らぐところ　休むところ　　そこから来る人を〈つれ〉というのでしょうか「わたし」と言う表現が多くみられる。「書かれなかった一冊の本　わたしがうつっていない一冊のあるばむというのがほんとうに存在したわたしの姿だったかもしれない」「かすかに窓を揺する風　それら　いくつもの小さい音はわたし」「いまの靴音は、わたしかもしれない　わたしが聞くおとだから」「他国の小路で 他人のような　じぶんがたってる　　あるいは　歩いている」「いまや老年のわたしの　あれは 透きとおった影だろう 道ばたの溝に躓いているよ」「ここにわたしがどうしているのか わからない」「わたしが部屋から出て行くわたしがみえる」「海が　歩いてくる足の裏がじゃりじゃり痛いけれど　　わたしは　すでに　いないようだ 」「どこかで　わたしとはちがう人が　ひとりで　同じことを考えている」わたしは今あるわたしを遠く向こうの世界から見ているのであろう、その足元は透明で今にも消えそう。 そして印象的なフレーズ：「隙間のない音が　不穏な安らぎへ」「書くということは実現することだ」「思い出というやつは　きょうは　ない　のに　まだあるように振る舞っている」 「戸を開けると　取り戻しようのない宵で」 「それがときおり　海に漏れだすのだ　夕とどろきがにじみ出すんだ」 「老いとはなにもので　どこから訪れるのか」 「おれの夕暮れ」 「記憶はおもいだすんじゃなく感じるもの」 「わすれるということは　黒板を拭うように　痕跡を消すことだろうか」 木澤詩をとても楽しく読めた。 詩を一編ずつではなく、詩集で読むと言うことをさせてもらえたように思う。 木澤詩はどこへ向かって歩いて行くのだろう。見届けていきたい。

たましいとのつながり

浜田裕子

「草というたましいのあつまるところ　揺らぐところ　休むところ　そこから来るひとを〈つれ〉というのでしょうか」（「いまから書かれる海」）という言葉は、ゆっくり味わうように読むのもいいけれど、早口言葉のように唱えてみたくなる心地よさがある。
詩集『燃える街／羊にいる場所』はⅠ部とⅡ部に分かれており、冒頭の作品はどちらもこの同じフレーズからはじまる。なめらかな言葉をすらすら読んでいると、するする詩の中へ導かれていく。

印象深いのは夕方から夜になる時間の境界、海と街の境界など、あわいで漂うものが気になる。

「陸と海のあいだで揺れている
あの　かもめホテルのロビーでサメは消えました
街そのものが　巨大な船　だったようです」（「海色のノートを買って」）

また、物心がついた頃から考えていたことに返事をもらえた作品もあった。

「わたしがいても　いなくても青い砂や小石や
しゅっと消えるフナムシは　どこへ行くのだろう
ぼくが生まれたときからどんどんどん　鳴っている
波は　どこへ行くか
わたしのほうが　どこかへいくのか　じつは
それぜんぶ　わからない　みんな同時に
どこかで起こっていた」（「海が歩いてくる」）

存在や記憶はうたかたのようでありながら、何かとつながって続いているように感じられ、読み終わると不思議に穏やかな安心感に包まれた。

「どこかで　わたしとはちがう人が
ひとりで　同じことを考えている」（「どこかで　わたしではない人が」）

「わたし」が語る柔らかさと、「おれ」が語る色っぽさも魅力のひとつ。語尾に「・・・を見たぜ」の「ぜ」が似合う人はあまりいない。しかし、似合う人が使うとはっとさせられる。作品からにじみでる色気と品の良さにも、心惹かれる詩集である。

見えない物象への細密なつぶやき

あるいは　たましひのゆめ

福田　知子

木澤豊氏の 10 冊目の詩集『燃える街／羊のいる場所』出版を版元の平居謙氏から聞いたとき、まず驚いた。眩暈のようなある種の感慨が波のように押し寄せてくるようだった。というのも、木澤氏が 9 冊目の詩集『かもめホテル』を出版される前後に、どうも「ぼけ」が始まったらしい…ということをご本人からそっと告げられていたからだ。思えば 6 年前のことだ。そのころ、認知症の親の介護のさなかにあってかなりキツかった私は、興味本位や他人ごとではなかった。私は、ひとの存在自体夢かもしれないし、詩人はいつも夢の中にいるようなものだからそれもいいではありませんか…と言ったか、言わなかったか。しかしともかく木澤氏のコトバは心にずっと残っていて、詩の会などで木澤氏と会うたびに変わらぬ無事を確かめるようにハグしていた。以前、今は亡き詩人・君本昌久氏が杉山平一氏から「僕は外剛内柔のようだが、あなたは外柔内剛ですね」と言われたという話を君本氏から聞いたことを思い出していた。木澤氏はまさに外柔内剛タイプだから。ご自身の詩には厳しいが、人の詩への論評はあたたかい。ゆっくりと詩句を詳細に分析しながら語り、あとの飲み会でも誰にでもフランクに接してくださり、語り口もソフトでやさしい。

私の木澤詩に対するこれまでのおおまかな印象は以下のようである。

神戸での詩の会に、木澤氏は宮澤賢治と共にやってきた。賢治の研究者でもある彼はその詩にも賢治の影が濃厚だ。むろん、直接的ではなく、内奥に沈潜したイメージのきらめきとしての影響だ。そこから派生した木澤詩の言葉遣いは独特である。モダンで古典的で抒情的（ときに演歌的抒情、短歌的抒情でなく）で、ユーモアに満ちた呟きの面白さがある。それらはきわめて男性的、だけどマッチョ的ではなく、硬派なはぐれもののようだ。自分で自分を笑い飛ばせる任侠な世界の住人は、人でもモノでも惚れた対象にはきっと限りなく義理堅いのだろう。詩語にもそれら片鱗はあちこちにちりばめられている。

さて、本詩集『燃える街／羊のいる場所』にふれてみよう。

全体を通してまず目に飛び込んでくる印象的なこれらのことば――「海」、「砂」、「鉄」、「錆」、「倉庫」、「古い階段」、「ガード下」、「窓（窓辺）」、「船」、「石」、「ガラス」、「草」、「光」、「雨」、「ひつじ」等々。これらの語彙が頻出し、独特のイメージ世界を構成している。つげ義春の絵のようなモノトーンの世界。昭和な風景――路地やガード下に象徴される煤けた

ような、どこか退廃的な静けさに包まれた不思議な形而上的世界。過去と現在と未来がひとつの空間で交錯し、海からどこにもない海へと衝きでていく反転地。

第一部「いまから書かれる海」――なんて暗示的なタイトルなのか…この平易な言葉が醸すこの不思議感覚はいったいどこから来るのか？この海はいわゆる海と相似形のどこにもない海であろうか。作者らしき詩の語り手は、作者と相似形のどこにもいない人であろうか…最初からいきなりさまざまな想像がよぎる。目次を目で追っていると、まるで一篇の詩のようではないか！　すべてがキーワードになった一篇の詩。目次に目をやるだけでも木澤の豊潤な言葉世界が立ち上げってくるようだ。

具体的に詩にあたってみよう。まず、第一部の「いまから書かれる海」、第二部「羊のいる場所」から。それぞれ最初の詩の書き出しが共通している。

草というたましいのあつまるところ
揺らぐところ　休むところ
そこから来るひとを〈つれ〉というのでしょうか
（「いまから書かれる詩」「羊のいる場所」）

「子どもには聞こえない美しい歌声、ゆうやけ　こやけのつきあたり、草を背なかいっぱい背負った男」（いずれも「いまから書かれる詩」）――ここには死者のイメージが濃厚にある。“在”と“不在”、あるいはあえて名付けるならば“夢の在”と言ってもよいかもしれない。「むすうの人の網の一点であるわたし」（「いまから書かれる詩」）の夢。自分がみる夢だけは自分のものに他ならない。そして、書くこともまた。彼にとって詩を書くとは何なのか？

ものを語るというのは　浮遊することばを聴くということだった
30 年前にオルの物語を書いたことがある
書くということは実現することだ
「いまから書かれる詩」

夢のごときなきものを聴き、「浮遊している小さい声」（「浮遊する見えないことの断片が」）を拾い集め、現実にひきだすことが、おそらく木澤にとっての詩作なのだろう。35 年前の詩集『帰途』から引用してみよう。

暗がりで織機のおとがした
なぜ　じぶんのからだを織るのかと
こっちからいうと

汽車の灯がつながってゆくのは
哀しいわ　と声がした
いいや　あれは　けものが
わたしの骨をくわえて
林をゆくんだよ　とこたえると
そんなら　まひるを織るわ　といった
「オルの物語」(『帰途』1985 年、沖積舎)

詩と死、そして夢…境界が曖昧になりつつある日々の時間の中で、それをいかに空間的な詩のことばへと昇華させていくか、それは詩を書き続ける覚悟と共に、詩人の生の中にあらかじめ内包された〈たましいのゆめ〉なのかもしれない。

ときに、つぶやきから詩と死が生まれることもある。

ひょっとすると　明日の朝は
起きないということもありうるなと

この街で　もう
わたしは　なにものでもないとわかっていた
「海色のノートを買って」

夜、寝床についたとき、当てのない散歩をしているとき、昔の物語をひとしきり思い出したとき、人はふと、しかし実感を持って真剣に、ため息をついて、腑に落ちる。そして、見えないことの断片がユーモアとなって可視化する。

わたしの血管に
黒い筋が伸びていくのが
スクリーンに見える
ふん　あれは心臓だな
わたしの内部というやつ
とん　とん　生きてるやつ
「浮遊する見えないことの断片が」

歩いても走っても　どろ　ほこり舞い踊り
とおく二上山もかすんでおる
そうだった　オルという織り人が麓に住んでいたが
いてもいなくっても　オルはいる

ひとり　歩いていく
そのひと
「べらぼうな」

木澤の詩には控えめだが鋭い社会批判性も濃厚にある。戦争だけではない。原発事故が放出している放射性物質も、コロナウィルスも「ユウレイ」に他ならない。

橋上から明るい街が見渡せる
ナニモナイというものの手触りが
いまは　ユウレイという名まえで
いく人も　橋を渡っている
「打越橋という場所」

やあ　両手をちぢめた黒く小さくなった人々よ
こんばんわ　三日三晩踊り続ける火たちよ
やってこい　きょう
昇れ　忘れ　かすれた　きょうに
「途方もなく長い壁が　遠くで」

第二部「羊のいる場所」――羊も木澤にとって暗示的なキーワードとなっている。恐怖にかられる羊も、怒りに追われる羊も、記憶という眠りのうちには感じるもの、すなわち、一種の手触りのようなものとなって波のように行き来するのだろう。だから、他（人）と比べようもない。大きさも小ささもどのようにも自らで決めることができる。

うん　大きい小さいって言っても
ネコという大きさ　羊っていう小ささ　というか
「羊のいる場所」

だから、空中に浮かぶこともできる。

幾枚にも剥がれたわたしのようなものが
空に浮いている
「羊のいる場所」

空中に浮遊する見えないものへの細密な観察眼！　きわめて作者に相似形の「わたし」が剥がれ、幾層にもなって空中に浮いているからこそ、見えてくる微細な差異。ここにもまた、木澤作品の秀逸な視点がひかっている。

目をつむると　鳥の目のひとつひとつが見える　その
黒い粒がみている隙間は
私の世界の欠けた部分と重なっている
（中略）
感じる　なにかが　満ちあふれて
　キラ　とひかるほこりの反射とちがうもの
「ナマズを引きずって」

私の世界の欠けた部分は、鳥の目の黒い粒ではなく、なんとそれらがみている「隙間」なのだ。満ちあふれると感じるものは、キラとひかるほこりの反射ではなく、それに似た「なにか」なのだ。見えないものを可視化する微小で繊細なアンテナは木澤独特のものだとおもう。

最後に、木澤詩を通しての〈ぼけ〉や〈老い〉について述べてみたい。
「ぼけてからじっと見つめよ　早ホタル」という衝撃的かつ何とも切ないタイトルの詩。

窓をあけると波音が聞こえる
窓下から軒へ　初蛍が闇を斜めに過った
夢のなかで夢をみている
（中略）
酌み交わされる酒がぼうっと青くひかって
窓下をさまよう影がふたつみつ　あるいは
闇の均衡　微風の均衡　わたしを縁どる白い波は
わたしといっしょに　立ち上がる時間だ
「ぼけてからじっと見つめよ　早ホタル」

ここで一緒に酒を酌み交わしているのは木辺弘児だろう。彼と木澤は、ぼけても詩を書くことを約束して木辺は先に逝ってしまった。夢のなかで見ている初蛍もまた木辺であろうか。すべてが闇と微風の均衡のうちに齎される、青い光に照らし出される、一瞬の宴だ。わたしを縁どる白い波はやわらかなひつじだろう。そこに揺蕩うやわらかな時間、至福のひととき…〈ぼけ〉ることは夢のなかでみている夢の世界なのかもしれない。だが「あの蛍火をいつまで　おぼえているか」という不安も同時にあるのが〈老い〉を生きるということなのだろう。

わたしがいても　いなくても青い砂や小石や
しゅっと消えるフナミシは　どこへ行くのだろう

（中略）
きょうもあしたも　つけくわえるものは何もない
（中略）
海が　歩いてくる
足の裏がじゃりじゃり痛いけれど
わたしは　すでに　いないようだ
「海が歩いてくる」

やはり老いはひとえにさみしい。両親をみていてもそうだ。ひとえに孤独でない老いなんてあるのか？　ただ作者には諦観としずかな覚悟がある。

わたしは　机の引き出しを　きちっとしておかないと
（中略）
このままかえらないこともあるだろう
（中略）
帰るとか帰らないとかじゃなく　時計はなつかしい
（中略）
「夕方に出かけるから」

救いは、わたしを見ている「わたし」がいること。しかもわたしの影でなく、抽象化した聴覚としてのわたし、つまりわたしの〈足音〉。それを意識的に聴き、野菜の緑、ベーコンの赤、インスタントラーメンの黄…と彩のある夕食をとっている。しかも〈最期〉ではなく、その可能性も含みつつのこの日〈最後〉の日常の夕食。なので、〈もう一つの階段〉とは何かはわからないが、少なくとも死への階段へは直結してはいない。音も、色も、食欲も、日常も、すべて生きることにつながっているから。

もう一つの階段を降りる
あれは　たしかに　わたしの　足音

野菜とベーコンとインスタントラーメンで
最後の夕食だ
「夕方に出かけるから」

2020 年 4 月

輪郭の崩壊

～木澤豊詩集『燃える街／羊のいる場所』に寄せて～

前田珈乱

【はじめに】

木澤豊詩集『燃える街／羊のいる場所』（以下、本詩集と言う）において、核に該当するのは「海」のイメージであるように筆者（前田珈乱）には感じられる。

象徴として、陸が意識ならば、海は無意識である。大まかに言って、意識は事象を分別してとらえ、無意識はそうでないとらえ方をする。死は（このようななまやさしいものでありえはしないが）象徴としては世界の意識から無意識への回帰である。最後に我々は眠りの海におりてゆく。同時に意識がえがいていた世界の輪郭は、ゆるやかに海水に溶かされ、想像の源へと還る。

本詩集には、意識から無意識への動線を流れながら構成されたと思しき要素が多く見受けられる。それは、木澤氏が海という志向性を強く持つからか、また別の要因があるのか、いずれにせよ、この徐々に輪郭が崩壊してゆく感触は人間の普遍的な潜在意識にうったえかけるものがあると筆者は思う。記憶は過去のものとは限らない上に、歴史において過去は未来となりうるからである。

この輪郭が崩壊してゆく感触の帰着点を、本詩集において、一つに表現、一つに詩集の構成の側面から検証してゆこうと思う。

【表現について】

〈世界はふたつ　みっつ　またむすう／あっちでもこっちでも　屋根の下で酒が酌み交わされ／ざわわ　とぷん　とぷんと　波が寄せては返し／おっ　酒場でうたうさびしい演歌のようじゃないか〉

（「ぼけてからじっと見つめよ　早ほたる」より）

上記引用を読んで多くの人が持つであろう違和感は、この表現が空間的また時間的にどこに目を置いて生み出されたか、そして生み出したのは何者という設定なのか、という疑問だと思う。宴会が繰り返されるさまを数えて〈むすう〉と言う。その視点は傍観者というにはあまりに無機質である。〈波が寄せては返し〉と海のイメージがかすめ、〈さびしい演歌のようじゃないか〉と嘲るように無常観をほのめかす。詩の印象を言葉の通りさびれさせてい

る。

無機質な傍観者については、人間より存在次元が上であるものを想起すると良いかもしれない。例えば、絵画の中の生きものは、絵画の外から我々の目に見られている。しかし、それに〈さびしい〉という感慨を持つこの主体は間違いなく世界の中に感覚を置いている者である。

この矛盾から、巨視的な何か、それに見られる主体、その中間的な位置に立つ主人公が想起される。これは評の冒頭でも述べた意識から無意識への動線の中の存在とも重なるものである。

また次のような表現がある。

〈でも　じぶんのうちそとの／区別がない〉

（「夢町の小路から」より）

〈わすれるということは　黒板を拭うように／痕跡を消すことだろうか〉

（「やわらかく　まるいものと」より）

己の内側と外側の間の境界線、また、存在の境界線そのものの消滅、これを突き詰めると己の存在の継続の可否の問題となる。その流れの中に身を置いている者がいるとすれば、まさに、視界の中の輪郭が崩壊してゆくような感覚に襲われていることだろう。

改めて輪郭が何を意味するかを言えば、世界の個別認識とそれを生み出す意識そのものである。それによって自身にとっての世界は成り立っている。それが滅びつつあるとすれば、それは、こういった議論をする前提そのものの崩壊である。詩を書いたり、それを読んだり、また、生活を能動的に営む前提そのものの消滅である。本詩集ではそのある種の悲哀を主題としてうたっているとも読めるが、木澤氏には何よりその立ち位置での心象を伝えたいという動機があるように感じられる。

【構成について】

本詩集は、偶然か必然か、初めから順に読む限りでは、先に述べた意識から無意識への動線をたどるものとなっている。

第一部、「いまから書かれる海」では比較的具体的な景色がえがかれ、その景色の中の事物も印象の強度を保っている。また、視覚だけでなく、嗅覚、聴覚的事象も現れ、世界としては通常レベルの現実感がある。

しかし、第二部「羊のいる場所」では、非現実感が強くなり、（本詩集の）作者の独白が増える。海の登場回数も増える。

筆者の手もとには詩集の内容だけでなく、編者解説があるのだが、それによると本詩集の大枠の編集は編者の平居氏が行なったようである。木澤氏がえがくことを欲した世界観と

でも呼ぶべきものは、木澤氏の個々の詩からにじみ出て、平居氏の発想にまで昇華されたのであろう。すぐれた世界観というものは本来的に威力を持つものだと筆者は考えているが、それを目の当たりにした思いである。

【おわりに】

輪郭の崩壊は前提の崩壊であることを先に述べた。前提の崩壊は心理としての若さが見落としがちな必然である。飛ぶものは翼の力を失うことを考えず、走るものは脚力の衰退の可能性を考慮せず、読む、書く、またその土台たる感性にも前提として健康性がある。木澤氏が望んだか否かにかかわらず、本詩集はそのすべての人間を襲うであろう前提の崩壊に対する意識の欠如に警鐘を鳴らすものとなっている。少なくとも読者はそのメッセージを読み取る可能性が高い。

しかし、木澤氏が本詩集で表現したかったのは、そのメッセージというよりはそれに臨む中間的な立ち位置から見える風景ではないか。それは恐らく誰もが見たもしくはいつか見る風景であり、故に本詩集は観点として独自性を保ちつつ普遍性を有する稀有な詩集だと言えるだろう。

（終）

いのちを吹き込む

マダムきゃりこ

なぜ人は詩を書くのか―
深く考えたり気にしたりしていませんでした.
無頓着で無自覚で無知だったからです.
ある日ふと考えてみたくなりました.
その契機については又別の折に触れることにして暫くお付き合いを―

＊

それは思いがけない贈物―りぼんを解きふたを開ければ，あちこちに散らばる玩具の数々，零れ落ちてくる言葉の数々，時を忘れて戯れましょうか―
詩集は「いま書かれる海」と「羊のいる場所」という二つの島で構成されています．異国への憧憬と牧歌的な響きのあるタイトルはしばしば現実を忘れさせ別世界へ誘う扉です．なぜなら，眼前に拡がる海，島には草喰む羊の群れという景色は，孤独な読み手（筆者）にはアイリッシュ海やらアイルランド島やらを偲ばせるからです.
時を経て心奥に熟成されたパッションがやわらかい布にでも包まれて目の前に置かれたような気分とでも云えばよいのでしょうか―
ページをめくるごとに飛び込んでくる作品群（海原）に引きずりこまれました．その扉は目の前に穏やかに開かれるのではなく，むしろ海風に激しく揺さぶられ音を立てて開いたからなのです.

〈作品の引用〉
それは　古い木造の古本屋の
狭い通路で見つかった
棚に一冊売れ残ったというふうに
なかは白紙だが　見えない文字がざわざわと
押し寄せて
漆黒の見返しのなかを
ひれをゆっくり動かして大きな魚が横切った
「海いろ（色）色のノートを買って(一部)」

さあ，これからいよいよ海を臨む場所から詩の旅が始まります.

〈作品の引用〉
かれは窓に目を向ける　ガラスの向こう
父が口を円く開けて死んでいく
見知らぬ女が　付き添っている
雪が　雪が通り過ぎる
そこ　から　かれは出ていく
窓に針が降り　木立を魚のかたちが泳ぎ去る
かれは　針の音に聞き入っている
ごろごろ石の海辺が　遠く弓形に見える
「燃える街（町）で(一部)」
〈作品の引用〉
生魚の切り身をむさぼって
明日はまた突端の
海からいうと　へこんだ町から出て行く予定だ
予定は　もう未定ではなくて
まもなく
海でも空でもないところへ向かって
この身を向けることになるはず
古い石碑に消えかけた文字のさまで
「突端の向こうに(一部)」

過去の確執から解かれて貪欲に目の前の海原に挑んでゆく姿が垣間見えてきます．それは希望に裏付けられた強い意志でもあります.
ここに詩人の旅立ちの＜原点＞をみます.

「この一秒この一刻が大事
眼鏡を柔らかい布で拭くように
硝子窓を乾いた布で拭くように磨いてみよう
急には感性は磨かれない
沈殿するのを待ってうわずみを掬ってみよう
それにふさわしい布を見つけよう
労わるように磨いてみよう
時間はそんなにないのよ
この一秒この一刻が大事
観て聴いて描いて感じて書いて触って舐めてみよう

磨かれた心と
透き通った眼鏡が
感性を少しずつ太らせてくれるから
急には感性は磨かれない」

〈作品の引用〉
頭のうしろに陽が昇ったら
やりたいことはすると　見なかった鯨に約束した
あいつは　小さな目と涙で
わたしのどこかが欠けた踊りを見つめていたな
でも　じっさいは真っ暗なガード下にしゃがむと
ばか薄っぺらい月が　ゴミくずを流す川に昇りました
という手紙には＜遠くに向かって＞と書いてありました
いまは＜聖洞窟時代＞のまっただなかと呼ばれていました
（中略）
目を近づけると　机に止まった羽虫が
かすかな虹いろを発して　もがいている
「ヨナ　散歩ね(一部)」

ここで詩人は自分を鯨の腹から吐き出されたヨナに喩えています．長い暗闇から脱出できた歓びも束の間そこはかつての居場所，様々な過去が蘇ってくる場所と気づきます．
彷徨う中で儚い羽虫に希望の光を見い出して再び歩み出そうとする姿，つまり＜再生＞のありさまが浮かび上がってきます．

〈作品の引用〉
夕焼けの坂道に並ぶ廃屋ごとに
表札の文字が　やっと読めた
窓は隙間だらけ
夕空いちめんに電線の網が絡まり
海鳴りが　細い急坂を流れ上がった
いやだれにも聞こえていない
と　女はおもった
それで　ネギとこんにゃくを買い
坂を上ったり降りたりした
駆けくだる坂は切れている
と知っていた

遠くで
大きな墓の上に
新しい町が　どんどん建っていく
この町では
閉めるの　開けるの
海の扉がぎいぎい
鳴って
「草の庭(一部)」

この女も又日常茶飯事を束の間逸脱し，夕暮れの鳥影の舞う海辺の町を放浪しています.
ここへ来てようやく筆者は＜自己投影＞している自分に気づかされます.

「人間は表現する生き物だ
表現しない人間はいない
表現することで生きている
息を吸って吐く
その行為こそが表現の原点だ
喜怒哀楽をどう表現するのか
その方法、手段、やり方・・・そこにこそ個性が滲み出る
歌う唄う謳う踊る廻る演じる読む語る描く書く作る造る創る・・・
息を吸って吐いて表現して人は初めて生きていると実感できる
その実感が欲しくて人は表現する
詩を書くとは
考えていること信じていること感じていることを
信念をもって綴ることであり
いのちを吹き込む作業であり―
なんと素晴らしい自己表現の方法なのだろう」

〈作品の引用〉
やはり白いノートだ　白いノートに帰って　続かないものな
あしたからの
古風でいい　あの歌い手の
老いとはなにもので　どこから訪れるのか
それで　濁って　さざ波立つ水面で
記憶は　ほっ　ほっと　抜けて行く
白々と

おれの　おれの　夕暮れだ
夜中に　じぶんの草稿を書きながら　白いノートに
天心だね　そうだね
「町なかの川をうたう(一部)」

ここまでひたすら詩人の一面を追いかけてきたに過ぎないのかもしれません―
机上を離れ，陸を離れ，いつしか俗社会から切り離されて流浪の旅を共にしてきたことには違いないのですが.
＜さすらいの詩人＞の旅はまだまだ続きます――

*

『燃える街／羊のいる場所』の刊行おめでとうございます.
詩集を手にして木澤　豊の作品を初めて読ませていただきました．そこには言葉の鋭い選択眼，構成の面白味，地に脚のついた仮想世界がありました．不可思議なリズムに乗せられてその作品群を音読しているうちに強く心が揺さぶられ，波のようにじわじわと心に打ち寄せてきたことを書き留めました．詩の朗読会（PoetryJunction）の席上で「打越橋という場所」をご自身の声で聴かせていただいたことを思い出します．その時の静かな衝撃がひたひたと甦りました.
古いシャンソンに「詩人の魂」という唄がありますが，いのちある限り時代を越え世代を超え立場を越えて語り継がれるそんな魂の世界にいつまでも興じていたいというそんな強い想いに駆られました.
詩を書くようになってまだ日の浅い時期にこういう機会が与えられ，このようなかたちで＜いのちを吹き込む歓びとその連鎖＞に気づかせていただけたことに深く感謝いたします.
（2020/04/01）